豕

田中貢太郎

青空文庫

李汾は山水が好きで四明山にいた。山の下に張という大百姓の家があって、たくさんの豕などを飼ってあった。永和の末であった。ちょうど秋の夜で、中秋の月が綺麗であるから、李汾は庭前を歩いた後に、琴を弾いていると、外の方で琴に感心しているような人の声がした。李汾は夜更けにこんな処へ何人が来たろうと思って、

「何人だね、この夜更けにやってきたのは」

と言うと、外から女の声で、

「私は秀才の琴を聞きにあがったのですよ」

と言った。李汾は不審に思って戸を開けてみると、若い女が来て立っていた。李汾が、

「あなたはどうした方です」

と聞くと、女は、

「私は張の家の者でございますが、今晩はお父さんもお母さんも留守でございますから、そっとお目にかかりにまいりました」

と言った。李汾が喜んで、

「穢い処でかまわなければおあがりなさい」と言った。

女があがってくると、李汾は茶を出して冗談話をはじめたが、女の口が旨くてかなわなかった。その後で、帷をおろし、燈に背き、琴瑟已に尽きたところで、雞が啼いて夜明けを知らせた。女は起きて帰ろうとしたが、李汾は女を帰すのが厭であるから、女の履いていた青い靴を一つ隠して籠の中へ入れた。そのうちに李汾はとろとろと眠りかけた。その李汾の体を女は揺って、

「どうか靴を返してください、今晩きっとまいります、その靴がないと、私は死ななくてはなりません」

と言って泣いたが、李汾はとうとう返さずに眠ってしまった。女は暫く悲しそうに泣いていたが、李汾が眼を覚ました時には、女はいずに床の前に流れている鮮血が眼に注いた。李汾は不審に思って籠へ入れてある靴を出してみると、豕の蹄殻となっていた。再び血を見てみると、家の外の方へ往っていた。朝になってその血の後をつけて往ってみると、張の家の豕を飼ってある処へ往った。そこには李汾のくるのを見て、眼を怒らして吠えかかってきた豕がいた。李汾はそのことを主人の張に話して、その豕を烹さした。

青空文庫情報

底本：「中国の怪談（一）」河出文庫、河出書房新社
　　1987（昭和62）年5月6日初版発行
底本の親本：「支那怪談全集」桃源社
　　1970（昭和45）年発行
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2004年11月3日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

豕

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/